

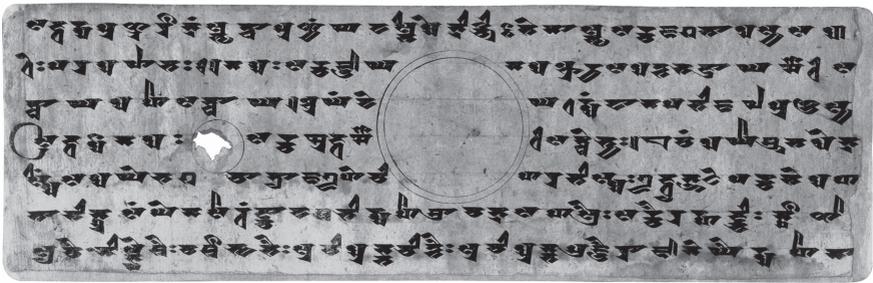


法華經写本シリーズ

Lotus Sutra Manuscript Series

東洋哲学研究所が、創価学会の委嘱（後に共同事業）により推進してきた「法華經写本シリーズ」の概要を紹介する。

冒頭に「シリーズ発刊の目的」「梵文法華經写本の3系統」「シリーズの学術的成果」「今後の展望」を概説し、その後、項目を立てて、各写本出版についての内容、背景、意義、出版形態などについての解説を収録する。



////////// 発刊の目的 //////////

『法華経』を中心とした初期大乘仏教の研究に貢献するため

創価学会と東洋哲学研究所は、1997年以来、法華経写本を所蔵する世界の研究機関および研究者の協力を得て、「法華経写本シリーズ」の刊行を推進してきた。これは、各国に保存されてきた貴重な法華経写本を鮮やかなカラー写真で撮影した「写真版」と、写本の“読み”をローマ字化した「ローマ字版」を公刊し、世界の研究者に広く提供して『法華経』を中心とした初期大乘仏教の研究に貢献するためである。1997年から2014年にかけて16点を発刊してきた。

また、当シリーズ発刊の契機の一つとして、当研究所創立者・池田大作創価学会名誉会長に対して、世界の研究機関等から貴重な「法華経写本」の複製やマイクロフィルム等が寄せられてきたことがあげられる。

梵文法華経の校訂本としては、これまで「ケルン・南條本」(1908-1912年)、「荻原・土田本」(1934-1935年)、「ダット本」(1953年)などの先駆的業績があったが、今日の学問的水準から見ると、より正確で信頼に足る校訂本が望まれている。当シリーズは、そのための基礎資料を提供するものである。

校訂とは：同一の経典であっても、伝承の過程で異読（異なった表現）や誤写（写し間違い）が発生する場合がある。現存しているいくつかの写本（手書きの文書）を比較し、以下の3点を行うことを校訂という。

- (1) いくつかの異読から、校訂者が適切と判断する読み（表現）を選択する。その際、できれば他の異読も注記で示す。
- (2) 誤写を正す。
- (3) 以上の2点を踏まえて、文章を確定する。

写真版とローマ字版について

梵文法華經の写本を「正確に読む」ためには、2つの大きな課題がある。当シリーズの写真版とローマ字版の刊行は、それぞれの研究機関及び専門家の協力を得て、これらの課題を克服し、世界の仏教研究に貢献するために企画された。

《写真版》

世界各国の研究機関に所蔵されている貴重な写本は、白樺の樹皮やターラ樹の葉、紙に書写され、数百年以上が経過している。それらの破損や劣化を防ぐため、研究者が原本を直接見ることはほとんど不可能である。

これまで、研究者は、1世代前の写真技術によって撮影されたモノクロの写真画像でしか写本を読むことができず、文字の欠落部分、墨の汚れ、微妙な筆遣いなどの判別が著しく困難で、それが正確な解読の大きな障害となっていた。

当シリーズの写真版は、所蔵機関の協力を得て、最新の写真・印刷技術を駆使して刊行された、研究者にとってはオリジナルに比して遜色の無い学術的価値を有するものである。このことにより、1つ目の課題が克服されたといえる。

《ローマ字版》

第2の課題として、かりに写本を見ることができたとしても、その解読には高度な知識と習熟が不可欠であるという点である。サンスクリット語に堪能な研究者がすべて、地域・時代によって異なる書体の写本を読みこなせるわけではない。その上、「写本」には欠落、後世の加筆がある。それらを「どのように読むか」は、語学的な知識とともに仏教用語への深い理解も必要となる。

こうしたことから、待望されてきたのは、写本の文字が正確にローマ字化されたテキストの発刊である。ローマ字化とは、写本の文字をローマ字に書き直し、誰でもその通り読めば、写本に書かれたテキストを音読出来るようにすることである。間違いや誤写を含めて忠実にローマ字化したものがあれば、これをもとに、より多くの研究者が研究資料として利用でき、他の資料との比較・対照も可能になる。

当シリーズのローマ字版は、「梵文法華經」写本研究の分野で世界的に名の高い戸田宏文(1936-2003年)徳島大学名誉教授(文学博士)の指導のもと、極めて精度の高い学術的価値を有するローマ字化の事業を進めることができ、二つ目の課題にも十分に対応可能な、高度な水準の出版となった。

「法華経写本シリーズ」一覧

出士別	写本名	出士別	写本名		
ネパール系	①ネパール国立公文書館所蔵 梵文法華経写本 (No. 4-21) ——写真版 	ネパール系	⑨大英図書館所蔵 梵文法華経写本 (Or. 2204) ——写真版 		
	②同 ローマ字版 1 		⑩同 ローマ字版 		
	③同 ローマ字版 2 		⑪インド・コルカタアジア協会所蔵 梵文法華経写本 (No. 4079) ——ローマ字版 		
	④ケンブリッジ大学図書館所蔵 梵文法華経写本 (Add. 1682 および Add. 1683) ——写真版 		ギルギット系	⑫インド国立公文書館所蔵 ギルギット法華経写本 ——写真版 	
	⑤ケンブリッジ大学図書館所蔵 梵文法華経写本 (Add. 1684) ——ローマ字版 			⑬旅順博物館所蔵 梵文法華経断簡 ——写真版及びローマ字版 	
	⑥東京大学総合図書館所蔵 梵文法華経写本 (No. 414) ——ローマ字版 			中央アジア系	⑭カーダリク出土 梵文法華経写本断簡 
	⑦英国・アイルランド王立アジア協会所蔵 梵文法華経写本 (No. 6) ——ローマ字版 				⑮ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所所蔵 梵文法華経写本 (SI P/5 他) (通称：ペトロフスキー本) ——写真版 
	⑧パリ・アジア協会所蔵 梵文法華経写本 (No. 2) ——ローマ字版 		西夏本	⑯ロシア科学アカデミー東洋学研究所サントペテルブルク支部所蔵 西夏文「妙法蓮華経」 ——写真版 (鳩摩羅什訳対照) 	

梵文法華經写本の3系統

現存する梵文（サンスクリット語）法華經写本は、出土した地域や書写の場所により「ネパール系写本」「ギルギット系写本」「中央アジア系写本」に大別される。



梵文法華經写本の3系統が出土した地域のイメージ地図。現存する写本は、書写時期と地理的な要因によって生じた書体とテキストの伝承の違いで、1. ネパール系、2. ギルギット系、3. 中央アジア系に大別される。ネパール系のテキストは、ギルギット系のテキストと密接な関連があると考えられる。

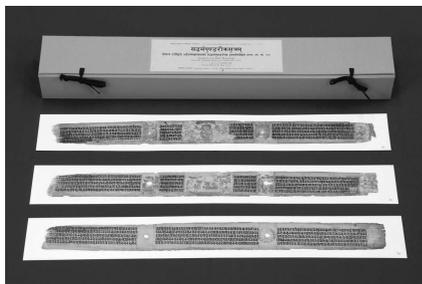
カシュガルから望む“世界の屋根”パミール高原。この険しい山岳を越えて仏教はインドから中央アジアへ、中国へと伝えられていった。



1. ネパール系写本

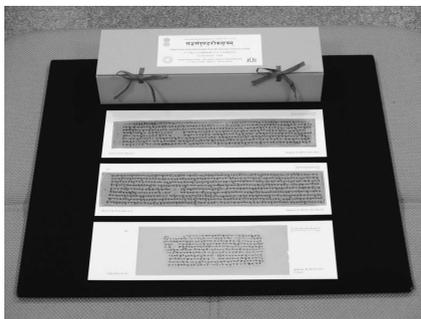
書写年代：貝葉本（11-12世紀）、紙写本（17世紀以降）。ネパールのカトマンズ盆地やチベットを中心にした地域で発見された写本類で、貝葉本と紙本を合わせると、30種類以上発見されている。ほとんど完本であることが他に類例を見ない点で、写本のグループ分けという独自の手法が成立する。

貝葉本のうち、当シリーズで刊行された①『ネパール国立公文書館所蔵 梵文法華經写本（No. 4-21）——写真版』（写真下左）と④『ケンブリッジ大学図書館所蔵 梵文法華經写本（Add. 1682およびAdd. 1683）——写真版』（写真下右）は、比較的、古い読みを傳承しており価値が高い。



2. ギルギット系写本

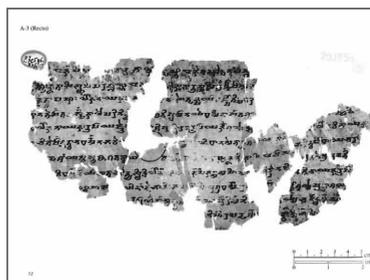
書写年代：6-8世紀初頭。1931年、カシミール地方のギルギット（現在はパキスタンの実効支配地域）で発見された多量の写本に、法華經写本も含まれていた。白樺の樹皮（一部、紙写本を含む）にグプタ文字で書かれている貴重な写本。⑫『インド国立公文書館所蔵 ギルギット法華經写本——写真版』が、2012年、当シリーズとして発刊された（写真下）。



3. 中央アジア系写本

書写年代：6-10世紀頃。「西域」と呼ばれたシルクロード周辺のオアシス国家の遺跡から発見された写本群である。最大のもは、ロシアのカシュガル総領事であったニコライ・F・ペトロフスキーが1893年に入手したもので、「ペトロフスキー本」あるいは「カシュガル本」と呼ばれている。この写本は8世紀のものと推定されている。⑮『ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所所蔵 梵文法華經写本 (SI P/5他)——写真版』が、2013年、当シリーズとして発刊された (写真下左)。

ほかに、出土した地域、収集者、所蔵機関の所在地などにちなむ、カーダリク出土本、ファルハードバーグ出土本、スタイン本、マンネルハイム本、トリンクラー本、旅順 (大谷) 本とよばれる写本、その他、無数の断簡がある。本来、1ヵ所にあった写本が、さまざまな事情により、別々の国に所蔵されているのである。また、未整理のものもある。当シリーズの第1点目となった⑬『旅順博物館所蔵 梵文法華經断簡——写真版及びローマ字版』 (写真下右) は、ホータン出土と推定され、5-6世紀の書体から推定される古い読みを伝承している貴重な資料である。



//// 「法華經写本シリーズ」の学術的成果 ////

「法華經写本シリーズ」の学術的成果として、次の3点が挙げられよう。

(1) 「法華經写本シリーズ」の16点には、「ネパール系写本」「ギルギット系写本」「中央アジア系写本」の梵文法華經の3系統に属する重要な写本が収録された。

(2) 「ケルン・南條本」の校訂に使用された7種類の写本と2つの部分的なテキストのうち、6種類の写本が当シリーズで刊行された。

「ケルン・南條本」とは、1908年から1912年にかけてロシア・サンクトペテルブルクにおいて5分冊で出版された、世界最初のサンスクリット語の「法華經」の校訂本である *Saddharmapuṇḍarīka, Bibliotheca Buddhica X* のこと。「ケルン・南條本」は、今日に至るまで、梵文法華經の標準的校訂本として用いられている。その校訂には、7つの写本と2種類の版本（第4章のフコーの石板刷りテキスト、第24章のワイリー所有の木版刷りテキスト）が使用された。当シリーズはそれらのうち、下記の6つの写本を刊行している。残りのワッターズ将来写本の所在が不明なので、実質的にすべての関係写本を写真版もしくはローマ字版で網羅したことになる。

- ④ 『ケンブリッジ大学図書館所蔵 梵文法華經写本 (Add. 1682 および Add. 1683) — 写真版』
- ⑤ 『ケンブリッジ大学図書館所蔵 梵文法華經写本 (Add. 1684) — ローマ字版』
- ⑥ 『東京大学総合図書館所蔵 梵文法華經写本 (No. 414) — ローマ字版』
- ⑦ 『英国・アイルランド王立アジア協会所蔵 梵文法華經写本 (No. 6) — ローマ字版』
- ⑧ 『大英図書館所蔵 梵文法華經写本 (Or. 2204) — 写真版』
- ⑩ 『同ローマ字版』
- ⑫ 『ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所所蔵 梵文法華經写本 (SI P/5 他) — 写真版』 (いわゆる、ペトロフスキー本、カシュガル本ともいう)

(3) 当シリーズの刊行によって、世界の研究者に梵文法華經写本研究の将来の礎たり得る資料を提供できたといえよう。

当シリーズには、ネパール系梵文法華經写本の研究にとって逸することのできない写本が網羅されている。すなわち、④ 『ケンブリッジ大学図書館所蔵 梵文法華經写本 (Add. 1682 および Add. 1683) — 写真版』、⑤ 『ケンブリッジ大学図書館所蔵 梵文法華經写本 (Add. 1684) — ローマ字版』、⑥ 『東京大学総合図書館所蔵 梵文法華經写本 (No. 414) — ローマ字版』は、南條が校合に用いた貝葉写本である。⑦ 『英国・アイルランド王立アジア協会所蔵 梵文法華經写本 (No. 6) — ローマ字版』は、いわゆる「ケ

ルン・南條本」の底本として使用された紙写本であり、⑧『パリ・アジア協会所蔵 梵文法華經写本 (No. 2) — ローマ字版』は、世界初の近代語訳であるビュルヌフの仏語訳 (*Le Lotus de la bonne loi*, Paris 1852) の底本であり、⑨『大英図書館所蔵 梵文法華經写本 (Or. 2204) — 写真版』及び⑩『同ローマ字版』は、「ケルン・南條本」の校合に用いられ、ネパール系貝葉写本のひとつのグループの読みを代表する貝葉写本であり、⑤『ケンブリッジ大学図書館所蔵 梵文法華經写本 (Add. 1684) — ローマ字版』は、「ケルン・南條本」の校合と、ケルンの英語訳 (*The Lotus of the True Law*, Oxford 1884) に使用された貝葉写本である。⑮『ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所所蔵 梵文法華經写本 (SI P/5他) — 写真版』は、南條の最終原稿を見たケルンが、最後にテキストの読みに入れた紙写本である。

当シリーズの最大の眼目の1つは、ネパール系貝葉写本と紙写本のグループ分けを可能な限り具体的に明確にすることである。これによって、「ギルギット・ネパール系梵文法華經校訂本」ともいうべきテキスト作成への展望が開ける。このグループ分けは、戸田宏文博士が生前懐かれていた構想であり、それをローマ字テキストという具体的な形態で、日本のみならず世界の研究者に発信できることは、大きな喜びである。

//// ////////////////////////////////////// 今後の展望 ////////////////////////////////////// //////////////////////////////////////

- A. プラークリット語で表現されたであろう最も古い法華經の原型の多くを伝える中央アジア系写本は断簡が多く、残念なことに、完本がないこと。
- B. 法華經のギルギット系写本は、完本ではないが、ネパール系写本の祖型と考えられ、中央アジア系写本とは異なる傳承を持つ。
- C. 法華經のネパール系写本は、11–12世紀に書写された貝葉写本と、17世紀以後に書写された紙写本に大別できる。それらの多くが完本である。

以上の事実から、「法華經」の新たな校訂本を編むためには、完本がそろったネパール系写本を考慮せざるを得ず、ギルギット写本を土台として、ギルギット・ネパール系校訂本の底本たり得る、ネパール系写本を模索することになる。ネパール系諸写本を整理し、分類する行程が不可欠な理由はここにある。

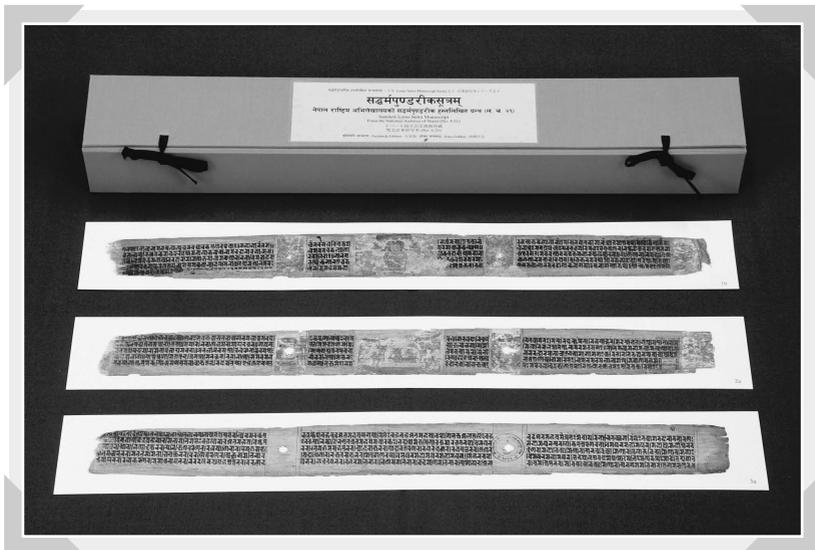
この分類作業が格段に進展したのは、当シリーズの進行と軌を一にする。個々のネパール系写本の分類上の位置づけについては、ネパール系写本の刊行本の序等において言及されているので、参考にしていただきたい。

さらに言えば、中央アジア系写本を基にした別の校訂本の編纂もきわめて有益であろう。2つのテキストを対照すれば、法華經傳承の変遷がより明確になるのではないだろうか。

「法華経写本シリーズ」の概要

①ネパール国立公文書館所蔵 梵文法華経写本 (No. 4-21) — 写真版

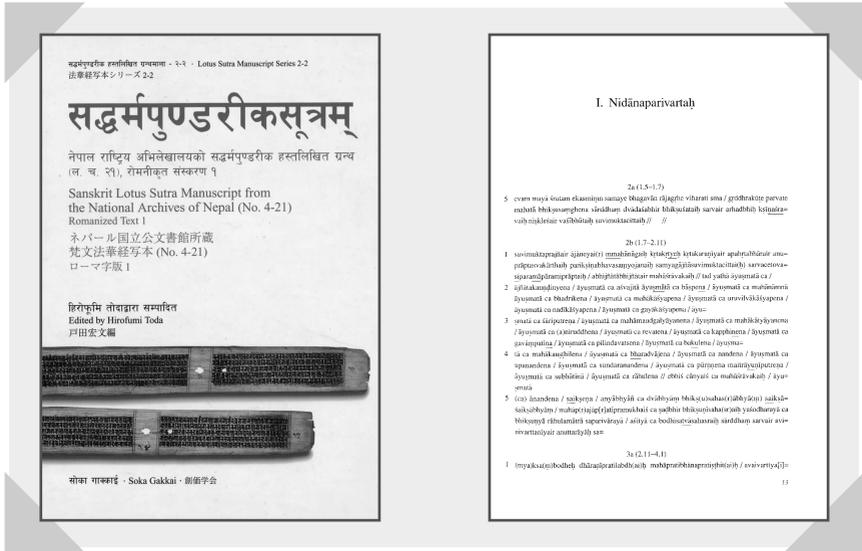
発行者：創価学会
 協力：ネパール国立公文書館
 写真監修：戸田宏文（徳島大学教授）、小槻清明（東洋哲学研究所委嘱研究員）
 制作統括：東洋哲学研究所
 発行日：1998年（平成10年）11月18日
 原典所蔵機関：ネパール国立公文書館
 写本書写年：西暦1151年
 枚数：x + 180（総計190枚）
 出版形態：カラー複製本、サンスクリット語、ネパール語、英語、日本語



②ネパール国立公文書館所蔵

梵文法華經写本 (No. 4-21) — ローマ字版 1

発行者：創価学会
 編者：戸田宏文
 協力：ネパール国立公文書館
 制作統括：東洋哲学研究所
 発行日：2001年（平成13年）5月3日
 I S B N : 4-88417-002-4
 原典所蔵機関：ネパール国立公文書館
 写本書写年：西暦1151年
 ページ数：xxvi + 132（総計158ページ）
 出版形態：サンスクリット語、ネパール語、英語、日本語

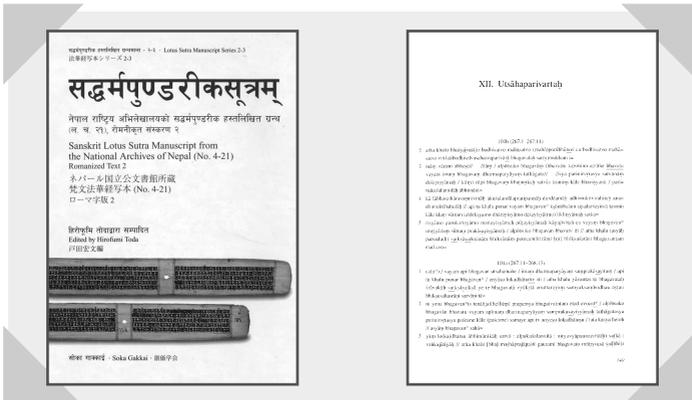


③ネパール国立公文書館所蔵 梵文法華經写本 (No. 4-21) —— ローマ字版 2

発行者：創価学会
 編者：戸田宏文
 協力：ネパール国立公文書館
 制作統括：東洋哲学研究所
 発行日：2004年（平成16年）3月25日
 I S B N : 4-88417-010-5
 原典所蔵機関：ネパール国立公文書館
 写本書写年：西暦1151年
 ページ数：xii + 144（総計156ページ）
 出版形態：サンスクリット語、ネパール語、英語、日本語

この写本の写真版および「同ローマ字版1」、「同ローマ字版2」ともに、戸田宏文の監修・編著である。

写本の冒頭は、ラーフラバドラの「妙法蓮華讃頌」で始まる。この写本は2つの部分からなる。Fols. 1-176, fol. 178b (A本) と fols. 177, 178a, 179a (B本) に分けられ、総計179枚である。B本は、A本の写しと考えられるが、B本にはA本にない奥書が加えられている。そこには、書写年月が記されている。ネパール歴271年（西暦1151年）のチャイトラ月（3-4月に相当）、アーナンダデーヴァ王の治世下で書写された。したがって、A写本の書写年代は、B写本と同じか、それ以前、およそ12世紀前半といえるだろう。写本の最後の部分が2つあることは、ケンブリッジ大学図書館所蔵本 (Add. no. 2197) に見られ、書写年代の書き方は同写本の第1本 (131b, 3) に似ている。



④ケンブリッジ大学図書館所蔵

梵文法華經写本 (Add. 1682 および Add. 1683) —— 写真版

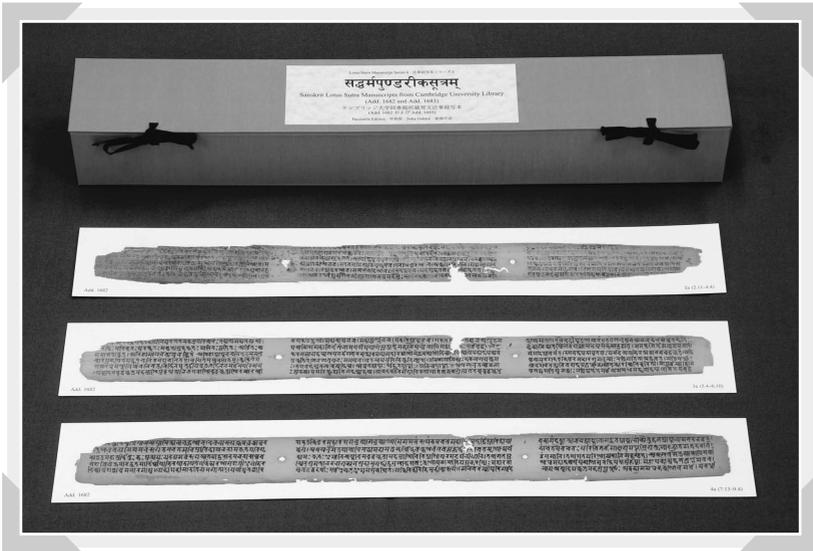
発行 者：創価学会
協 力：ケンブリッジ大学図書館
許 可：ケンブリッジ大学図書館評議員会
編 者：戸田宏文他
制作 統 括：東洋哲学研究所
発行 日：2002年（平成14年）3月26日
I S B N：4-88417-0004-0
原典所蔵機関：ケンブリッジ大学図書館
写本書写年代：10世紀-11世紀ごろ
写 本 枚 数：xvii + 84 + 142（総計243枚）
出 版 形 態：カラー複製本、サンスクリット語、英語、日本語

この写本の写真版は、1873年から1876年にかけて、ダニエル・ライトがネパールで収集した諸文献のなかの梵文法華經の貝葉写本 Add. 1682, Add. 1683 をきわめて精巧なカラー写真で出版したものである。

写本 Add. 1682 は、テキスト全体の後半部分が失われ、宝塔品の第24偈の後半のはじめの箇所までしか残されていない写本であるが、戸田宏文によれば、ネパール系写本のなかでも、最も古層に属する写本の1つである。

写本 Add. 1683 は、これも古層に属する写本ではあるが、戸田博士によれば、筆跡の違い、書写内容の不均一性から推察して、少なくとも5人の書写生によって書写されたものであるという。詳細な分析は、今後の検討に委ねなければならないが、非常に重要な写本であることは間違いない。

こうした事実を思い合わせると、この写真版の出版は、梵文法華經写本研究に一層の深みと、将来に限りない展望を与えるものであるといえる。写本研究者は、この写真版を手にするとき、コピーの不鮮明な文字のために、これまで解決できなかった読解上の多くの問題点が氷解し、研究面での新たな進捗を確信することができるだろう。

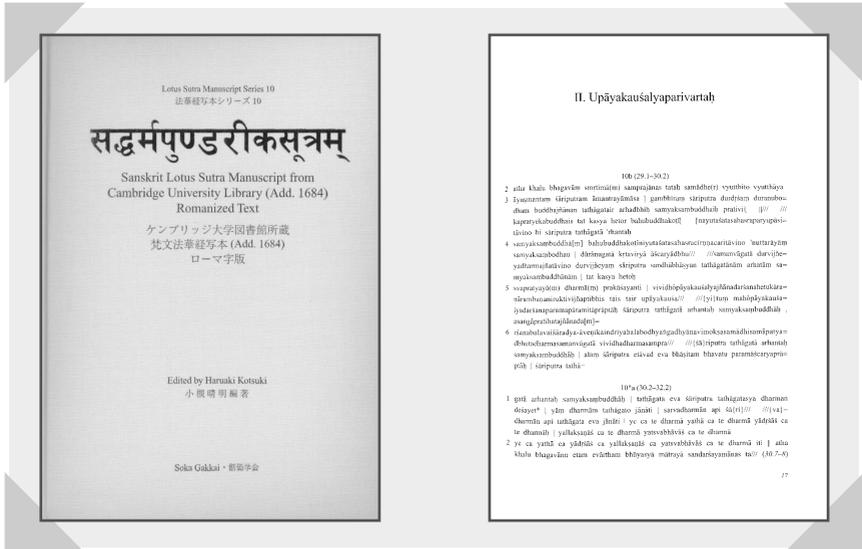


ネパールのカトマンズよりヒマラヤ山脈の白雪を望む

⑤ケンブリッジ大学図書館所蔵
梵文法華經写本 (Add. 1684) —— ローマ字版

発行 者：創価学会
編 著 者：小槻晴明
制 作 統 括：東洋哲学研究所
発 行 日：2010年（平成22年）3月31日
I S B N：978-4-88417-024-0
原典所蔵ならびに協力：ケンブリッジ大学図書館
写 本 系 統：ネパール系貝葉写本
写 本 書 写 年：西暦1064-1065年
ペ ー ジ 数：lx + 284（総計344ページ）
出 版 形 態：サンスクリット語、英語、日本語

この写本は、「ケルン・南條本」の校合に使用された。



⑥東京大学総合図書館所蔵 梵文法華經写本 (No. 414) —— ローマ字版

発行者：創価学会

編者：小槻晴明

制作統括：東洋哲学研究所

発行日：2003年（平成15年）11月25日

ISBN：4-88417-008-3

原典所蔵機関：東京大学総合図書館

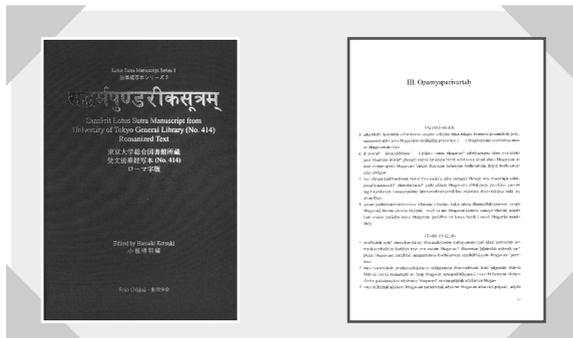
写本書写年代：17-18世紀

ページ数：xxxvi + 279 図版1ページ（総計316ページ）

出版形態：サンスクリット語、英語、日本語

本書は、仏教学者にして探検家である河口慧海師が1903年にネパールから将来した紙写本のローマ字版である。終始、1人の書写生によって、麗筆のランジャンー文字で書かれ、誤写、欠落が比較的少ない、良質の写本である。第1葉裏（1b）の中央に描かれた仏陀と弟子たちの彩色画は、他の紙写本のものとは比べると格段に精密に描かれている。この写本は、「ケルン・南條本」の校合に使用された写本の1つである。そのために、この写本の学術的価値はよりいっそう高まったといえる。

ネパール系の梵文法華經写本は、11-12世紀頃に書写された貝葉写本群と17世紀以降に書写された紙写本群に大別されるが、この紙写本には、両者の要素がみられる。貝葉写本群との関連では、「ネパール国立公文書館所蔵写本 (No.5-144)」とカトマンズの「アーシャー古文書館所蔵断簡」にほぼ一致し、紙写本群との関連では、⑦『英国・アイルランド王立アジア協会所蔵 梵文法華經写本 (No.6)』と、そのグループの紙写本群に極めて近い読みを保有している。



⑦英国・アイルランド王立アジア協会所蔵 梵文法華經写本 (No.6) ——ローマ字版

発行者：創価学会

編著者：小槻晴明

制作統括：東洋哲学研究所

発行日：2007年（平成19年）3月30日

ISBN：978-4-88417-016-5

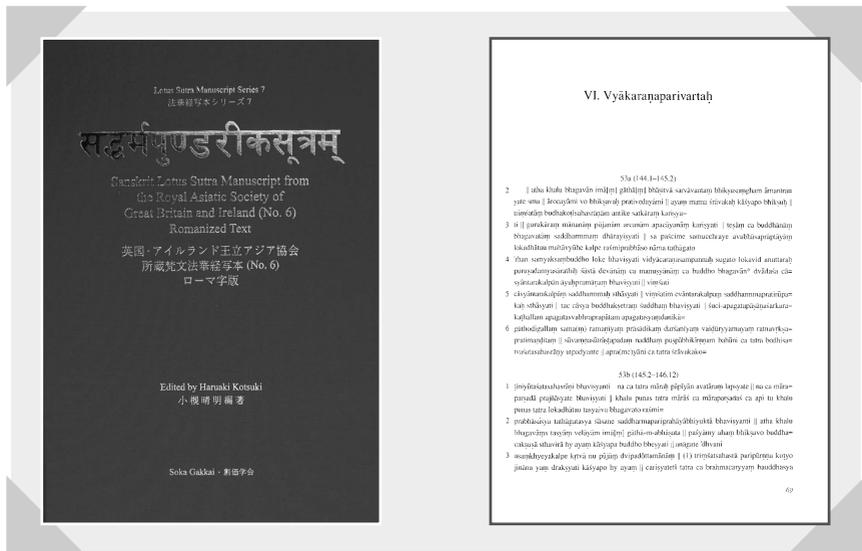
原典所蔵ならびに協力・許可：英国・アイルランド王立アジア協会

写本書写年：西暦1801-1802年

ページ数：xxxvi + 244（総計280ページ）

出版形態：サンスクリット語、英語、日本語

本書は、日本の南條文雄と笠原研寿が「ケルン・南條本」の手書き原稿を作成する際に、底本として1880年頃に最初に書き写した紙写本である。その後、系統が異なる写本がテキストの校合のために無原則に使用され、底本となった本書の読みの原形はわからなくなってしまった。この「英国・アイルランド王立アジア協会本」のローマ字化は、この底本の“失われた原形”を明らかにするものであり、法華經写本研究の基礎作業として不可欠の課題であった。

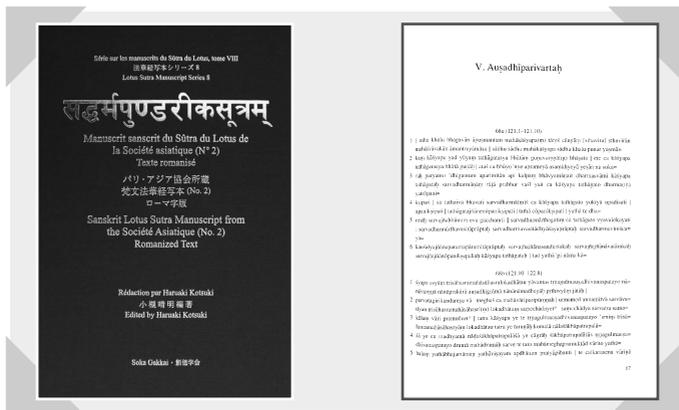


⑧パリ・アジア協会所蔵 梵文法華經写本 (No.2) —— ローマ字版

発行者：創価学会
 編著者：小槻晴明
 制作統括：東洋哲学研究所
 発行日：2008年（平成20年）3月31日
 I S B N : 978-4-88417-018-9
 原典所蔵：パリ・アジア協会
 写本書写年：不明
 ページ数：lx + 284（総計344ページ）
 出版形態：サンスクリット語、フランス語、日本語、英語

1837年末までに、ネパール駐在イギリス公使だったブライアン・H・ホジソン（1800-1894年）は、ネパールで入手した貴重な仏教經典の数々を、フランスの「パリ・アジア協会」に送っていた。

ヨーロッパにおける仏教研究の草分けの1人である同協会のユジェーヌ・ビュルヌフ（1801-1852年）は、さまざまな經典の中に、完全な法華經の梵文写本を発見した。彼は、この梵文写本のフランス語への翻訳を即座に開始し、1839年に完成。さらに精細な注記を加え、ヨーロッパの言語としては初となるフランス語訳「法華經」（*Le Lotus de la bonne loi*, Paris 1852）は、1852年に彼の死後、上梓された。基礎研究を進める仏教文献学者の間では、フランス語訳の底本となった、この写本のローマ字化が久しく待望されていた。このローマ字版の出版は、ビュルヌフ訳から150余年を経た世界初の快挙である。



⑨大英図書館所蔵
梵文法華經写本 (Or. 2204) — 写真版

発行者：創価学会

制作統括：東洋哲学研究所

発行日：2009年（平成21年）3月31日

I S B N : 978-4-88417-021-9

写真撮影・提供：大英図書館・国際敦煌プロジェクト
(The International Dunhuang Project)

写本書写年代：推定11-13世紀

枚数：vi + 177（総計 183枚）

出版形態：カラー複製本、サンスクリット語、英語、日本語

この貝葉写本は、以前は大英博物館に所蔵されていたものであるが、現在は大英図書館の所蔵となっている。カタログ番号は、Or. 2204、全部で175葉ある。第28葉が欠けているが、単に番号を「28」とすべきところを1つ飛ばして「29」としてしまったものである。この部分におけるテキストの欠落はない。

書写された時期は不明であるが、11-13世紀のものであると推定される。この写本は、「ケルン・南條本」の校合に使用され、略号Bで脚注に引用されている。しかし、第125葉裏面の最後から第126葉表面の最初にかけて、「ケルン・南條本」の319ページ6行目から350ページ3行目に相当する部分が欠落したまま書写されている。

戸田宏文によれば、いくつかのグループに分けることのできる貝葉写本群の1つのグループ（B系と呼ばれる）を代表する写本であるが、そのB系の全容が十分に解明されたとは言いがたい状況であり、将来の研究課題となっている。この写真版の発刊は、今後の貝葉写本の研究にとって大きな前進となる一歩を踏み出したことになる。

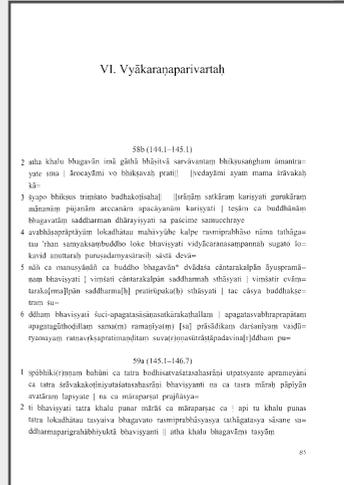
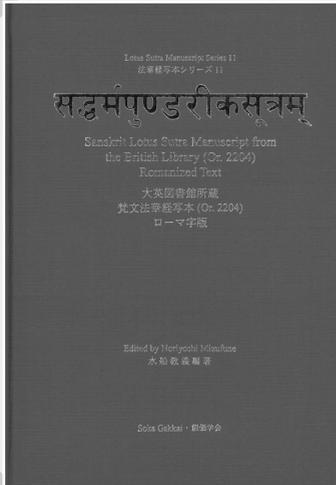


ヒマラヤ山脈に続く一本の道 (ネパール)

⑩大英図書館所蔵

梵文法華經写本 (Or. 2204) — ローマ字版

発行者：創価学会
 編著者：水船教義（東洋哲学研究所委嘱研究員）
 制作統括：東洋哲学研究所
 発行日：2011年（平成22年）3月31日
 I S B N：978-4-88417-026-4
 原典所蔵ならびに協力：大英図書館
 写本書写年代：推定11-13世紀
 ページ数：xxxii + 272（総計 304ページ）
 出版形態：サンスクリット語、英語、日本語



⑪コルカタ・アジア協会所蔵

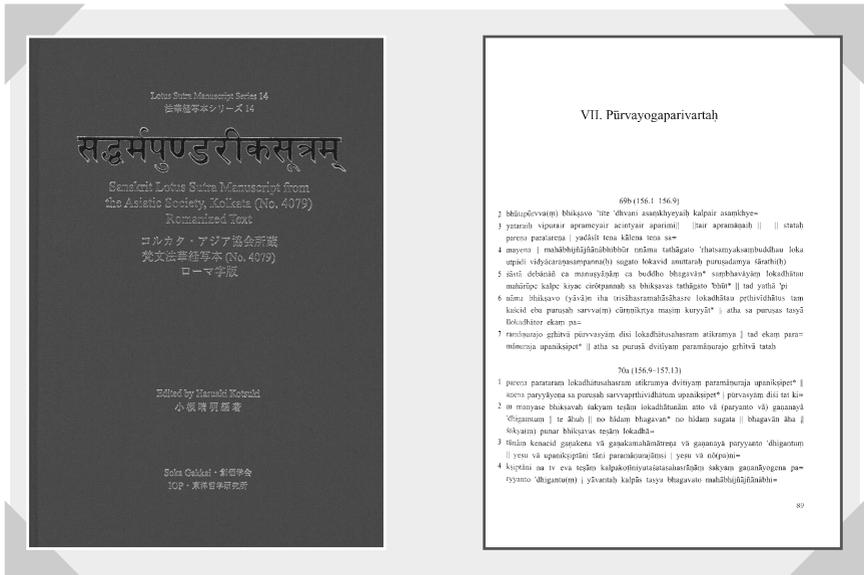
梵文法華經写本 (No. 4079) —— ローマ字版

発行者：創価学会、東洋哲学研究所
 発行日：2014年（平成26年）3月28日
 I S B N：978-4-88417-067-7
 編著者：小槻晴明
 写本書写年：西暦1680-1681年
 ページ数：xxxii + 340（総計 372ページ）
 出版形態：サンスクリット語、英語、日本語

インド・コルカタのアジア協会が所蔵する、梵文法華經紙写本 No. 4079 のローマ字版である。

同写本の書写年には、ネパール暦800年（西暦1680年）という記述が見られ、現在披見できる紙写本の中では最も古いものである。

これは、ネパール系貝葉写本の書写時期（西暦11世紀頃から12世紀頃）から400年後に始まる紙写本の書写時期の始まりを告げるもので、その後の紙写本書写の流れの源流となった貴重な資料である。



⑫インド国立公文書館所蔵
ギルギット法華經写本——写真版

発行者：インド国立公文書館、創価学会、東洋哲学研究所

発行日：2012年（平成24年）3月24日

I S B N：978-4-88417-031-8

編集責任者：水船教義

写本書写年代：推定6 - 7世紀頃

枚数：xxxii + 235 + 10（総計 277枚）

出版形態：カラー複製本（説明文等：英語と日本語）

1931年、カシミールのギルギット（現在は、パキスタンの実効支配地域）近郊にあるナウプルの僧侶の住居であった遺跡から発見された写本群に混じって、法華經の写本も発見された。大部分が腐敗や変質に強い白樺の樹皮に書かれており、当地の寒冷な気候も手伝って、現代まで保存された。なお、一部の写本には紙に書かれているものもある。この紙はごく初期のものと推定され、紙の歴史をたどる上でも貴重な資料といえる。これらの法華經写本は、まとまった梵文法華經写本としては最古の部類に入るが、A、B、Cの3つのグループに分けられる。グループAとCの奥書が幸いにも残され、それらの記述から法華經を寄進した人々の様子が分かり、法華經信仰の状況を知る上で、きわめて貴重である。

ギルギット法華經写本の大部分はインド国立公文書館に所蔵され、一部はインド国外にある。1974年には、インド文化国際アカデミーの創立者のラグ・ヴィラ博士と同理事長のロケッシュ・チャンドラ博士の父子によって、インド国立公文書館所蔵のほとんどの写本の写真版が「シャタピタカ・シリーズ」として出版された。1982年には、ドイツのオスカル・フォン・ヒニューバー博士（ドイツ・フライブルク大学名誉教授）が、カシミールに保管されている30葉の断簡を『新・ギルギット法華經梵本』(*A New Fragmentary Gilgit Manuscript of the Saddharmapuṇḍarikasūtra*)として発表した。

今回の出版は、インド国立公文書館、ロケッシュ・チャンドラ博士、ヒニューバー博士らの協力を得て、同公文書館に所蔵されている法華經写本を鮮やかなカラー写真版として複製したものである。

発刊に際して、ヒニューバー博士の論考「ギルギットの梵文法華經——写本と信奉者たちと工匠たち」を収録しているが、そのなかで博士は次のように述べている。

「ギルギット法華經写本に関する上記の考察は、この經典が6世紀後半から8世紀初頭にかけて、パローラ・シャーヒ (Palola Śāhi) 王朝治世下のギルギットの仏教文化の中にしつかりと根付いていたことを示している。經典の伝承は、法華經の写本を書写する営

みによって洗練されていった。奥書の内容から得られる結論として、これらの写本は礼拝時に用いられたと言える」

「結論して言えば、ギルギットの経蔵から回収された法華經写本は、最初の、完全ではないにしても、梵文法華經の大部分を伝承したテキストであるという意義を有するだけではない。仏教と古代ギルギットの仏教文化が流布した多くの地域において、法華經の存在を感じさせるということでもある。このことは、古代インドの写本から見出された他のいかなる事実よりも、法華經の直接的な影響について物語っている」



ギルギットの近くにあるコヒスタン渓谷（パキスタン）。
切り立った崖などに刻まれた仏塔の岩絵

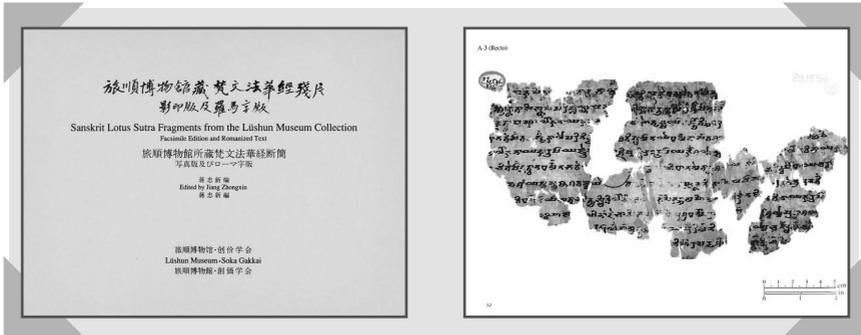
⑬旅順博物館所蔵 梵文法華經断簡——写真版及びローマ字版

発行者：中国・旅順博物館、創価学会
編者：蔣 忠新（中国社会科学院研究員）
制作統括：東洋哲学研究所
発行日：1997年（平成9年）5月3日
原典所蔵機関：旅順博物館
ページ数：xxxvi + 204（総計 240ページ）
出版形態：カラー写真版、中国語、日本語、英語

日本の「大谷探検隊」によって行われた、1902-1904年、1908-1909年、1910-1914年の3回にわたる探検・調査の結果、多数の西域の文物が収集された。その中に中央アジア系の梵文法華經写本の断簡が多数含まれていた。この中には、書写年代も書体も異なる様々な断簡が見いだされる。特に、写本A、写本Bに分類される断簡は、鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』の解明にあたり、重要な手がかりとなる内容を含んでいる。これらの断簡は、日本に持ち帰られることなく、中国の都市、旅順にとどめ置かれた。

1923年、西本願寺の大谷光瑞師（1876-1948年）の招聘で上海の無憂園に滞在していたロシアのニコライ・ミロノフ（1880-1936年）が、これらの断簡の整理と研究を行い、ローマ字テキストのタイプ原稿を1927年までには完成していたと考えられる。このローマ字テキストは、1953年にインドのN・ダット（1893-1973年）によってカルカッタ（コルカタ）のアジア協会から出版された法華經校訂本（通称ダット本）の脚注のなかに載録された。これらの断簡は、1929年、光瑞師によって旅順博物館の前身である「閩東庁博物館」に譲渡された。同博物館は現在「旅順博物館」となっている。旅順博物館所蔵の断簡は、ミロノフのローマ字テキストがダット本に載録されて以後、その行方も含めて全貌はベールに包まれたままであった。

1994年、蔣氏は北京で東洋哲学研究所の一行と会い、1981年以来研究をつづけてきた旅順写本の出版の可能性について協議した。1996年、旅順写本の撮影が行われ、翌1997年春、蔣忠新編『旅順博物館所蔵 梵文法華經断簡 —— 写真版及びローマ字版』として出版された。この出版は、長年の学術的課題を解明したという意味でも、「法華經写本シリーズ」の冒頭を飾るにふさわしいものといえる。



新疆ウイグル自治区のクチャ（古代・亀茲国）の
スパン故城の仏塔

⑭カードリク出土 梵文法華經写本断簡

(*Fragments of a Manuscript of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra from Khādaliq*)

発行者：創価学会

編者：クラウス・ヴィレ博士

(ドイツ・ゲッティンゲン大学インド学仏教学研究所)

制作統括：東洋哲学研究所

発行日：2000年(平成12年)5月

原典所蔵機関：ドイツ・ベルリンの国立図書館、ミュンヘンの国立民族学博物館、
ロンドンの大英図書館

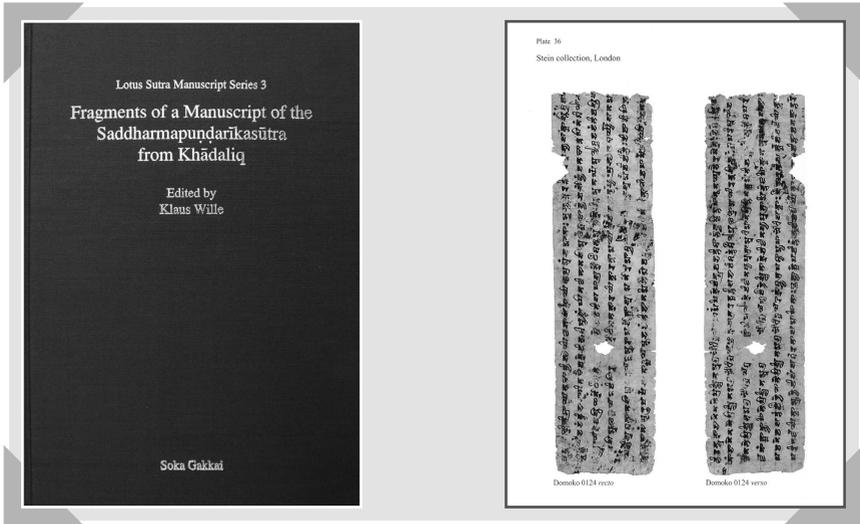
ページ数：xviii + 192 + 86 (総計 296ページ)

出版形態：サンスクリット語、英語、写真版

カードリクは、現在の中国新疆ウイグル自治区のホータンの東115キロの地点に位置する遺跡である。ここで発見された梵文法華經写本は、20世紀初頭、盗掘者たちによってヨーロッパの探検隊にバラ売りされ、現在のような断簡となって、ベルリン国立図書館のトルファン・コレクション、ミュンヘン国立民族学博物館のフランケ／ケルバー・コレクション、ロンドン大英図書館のスタイン・コレクション、ヘルンレ・コレクションとして保管されている。

編者のゲッティンゲン大学インド学仏教学研究所(現インド学チベット学研究所)のクラウス・ヴィレ博士は、4つのコレクションに分散しているこれらの断簡の写真の収集・整理の作業を1988年から開始し、97年までにそれらのローマ字転写本、ドイツ語の序論、コンコードダンス(対照表)を完成していた。

当時の同研究所所長ハインツ・ベッヘルト教授の提案により、その英語版が当シリーズとして2000年に出版された。写真版の83枚の図版のうち39枚目の図版(モノクロ写真)以外はすべて鮮やかなカラー写真である。また、これらの断簡と他の中央アジア出土の梵文法華經写本テキストとを対照した精緻を極めたコンコードダンスは、専門家必携の資料であり、その高い完成度に世界の仏教学者から賞賛の声が寄せられている。



ホータンを出発し、朝焼けのタクラマカン砂漠へ向かうラクダ隊

⑮ ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所所蔵
梵文法華經写本 (SI P/5他) —— 写真版

発行者：ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所、創価学会、東洋哲学研究所

発行日：2013年（平成25年）9月26日

I S B N : 978-4-88417-059-2

編集責任者：水船教義

写本書写年代：推定8世紀

枚数：lxxvi + 1 + 503（総計 580枚）

出版形態：カラー複製本（サンスクリット語、ロシア語、日本語、英語）

ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所の I・F・ポボワ所長は、発刊における「巻頭の辞」でこう述べている。

「今回の梵文法華經の出版は、誇張なしで100年以上におよぶ数世代の収集家、研究者、管理担当者、修復専門家の献身的な営為と努力のたまもであります。本出版に納められた法華經写本は、ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所に所蔵されてきたもので、東洋諸民族の写本と典籍を納めた世界最大、かつロシアにおける最も価値あるコレクションの中の『至宝』であります。当研究所の写本コレクションには、65の現存する東洋言語と死後になった東洋言語で書かれた11万5千点以上の収蔵品が保存されています」

「SI P/5」、通称「ペトロフスキー本」法華經は、ホータン在住の人物が発見したものと推定され、カシュガル（現在の中国・新疆ウイグル自治区）駐在のロシア総領事ニコライ・F・ペトロフスキー（1837-1908年）が、その大部分を入手。ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所の前身である「アジア博物館」に送ったものである。「カシュガル本」とも呼ばれている。



ホータン（古代・于闐国）の南郊に位置するマリカワト故城。
 タクラマカン砂漠の南辺にあり、西域南道の最大のオアシス都市として
 にぎわい、大乘仏教が花開いた地域

⑩ ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク 支部所蔵 西夏文「妙法蓮華経」——写真版（鳩摩羅什訳対照）

発 行 者：創価学会

写真版編集（漢訳対照を含む）：

西田龍雄（京都大学名誉教授）、宮川美法（東洋哲学研究所委嘱研究員）、

松岡承一（カメラマン）

制 作 統 括：東洋哲学研究所

発 行 日：2005年（平成17年）3月25日

I S B N：4-88417-012-1

原典所蔵機関：ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部

翻 訳 年 代：12世紀、鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』からの重訳

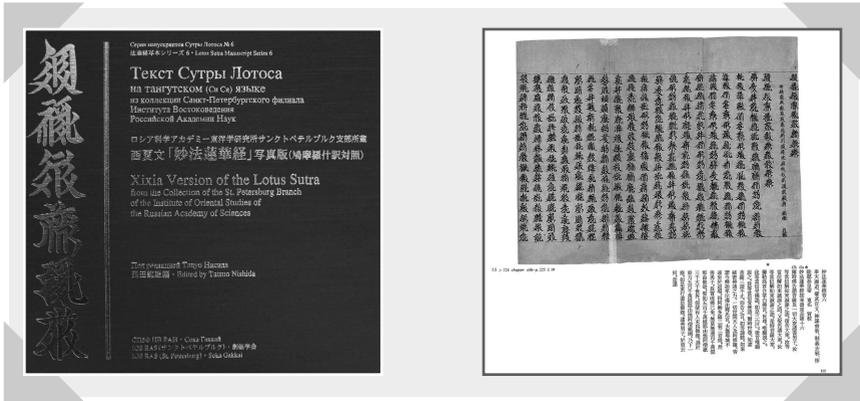
ペ ー ジ 数：236 + Ixiv（総計 300ページ）

出 版 形 態：写真版、西夏語、漢語、ロシア語、日本語、英語

シルクロードの東端の要衝の地に建国された西夏国（西暦1032-1227年）は、仏典を含む中国文献を西夏語に翻訳する国家プロジェクトを初代皇帝李元昊（在位1032-1048年）の治世に開始した。西夏語は、チベット・ビルマ語派に属し、西夏国の主要構成部族の口語からつくられた文章語であり、それを表記するために考案されたのが西夏文字であった。

翻訳事業の進展とともに、西夏語はしだいに推敲され、表現力豊かな文章語に練り上げられていった。「西夏文法華経」は、それがかなり進展した12世紀の仁孝皇帝（在位1139-1193年）の治世に完成した。これは鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』からの重訳である。

ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部（現・東洋古文書研究所）に所蔵される、学術的に貴重な「法華経」の西夏文テキストが、鮮明な写真版の形で、西夏語研究の第一人者、京都大学名誉教授・日本学士院会員の西田龍雄博士（1929-2012年）の編集により出版されたことは、西夏語研究の将来の発展に大きく貢献するものと期待される。



西夏王国の第2の都・カラホト（黒水城）城外の仏教遺跡